

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第39回 第10.1.6.2節～第10.1.8.4節

2019年8月1日

小田 勝

前回あげた「動詞～形容詞」の対であるが、「嘆く～嘆かはし」「笑む～笑まはし」のように、形容詞形が「-はし」の形になる場合もある。ほかに、「侮る～侮らはし、かかる～かからはし(万800)、誇る～誇らはし、祈ぐ～願はし」など。「いそがし」は主体が忙しいの意、「いそがはし」は他者から主体が忙しそうに見えるの意である。「処置に苦しむ」の意の「あつかはし」という語について、「扱ふ」の形容詞形(「扱はし」とされるが、「暑かはし」の一義とみる説、「扱はし」に「世話をしたい」の意もあるとする説(また、この意のみを認める説)があつて、混乱しているようである。

273頁「10.1.6.3 副詞の形容詞化」では、用例を追加する。

- ・返事申すべけれども、道のほどもいかがしき間、わざと申さぬなり。(承久記・元和四年古活字本)
- ・文の端つかたに、「……」とかしこまりを(=慎ンデイルトイウコトヲ) はなはだしう [書イテ] おきたれば(蜻蛉)

同頁「10.1.6.5 -なし」。「むべなし」は副詞「むべ」に接尾辞「-甚し」が付いたもので、『蜻蛉日記』に数例みえる特異語である。悪い予感が的中したときに用いられる(期待通りの場合は「案のごと」などが用いられる)。

- ・「疑はし…」など思ふほどに、むべなう、十月つごもりがたに、三夜しきりて見えぬ時あり。(蜻蛉)

次例は、「わりなし」の反対であるとして、即興的に作ったことばである。

- ・「わりある隨身の姿かな」と忍びやかに言ひけるを、…「わりあるとはいかにのたまふことぞ」と咎めければ、「…この人々『わりなき者の様体かな』と言ひ合はせつるに少しも似給はねば…」と言ひたりければ(宇治4-10)

274頁「10.1.6.6 その他の形容詞を作る接尾辞」では、「②-がまし」の語例に「戯れがまし・歌がまし・かごとがまし・寛ぎがまし・恥ちがまし・人がまし」を、「③-めかし」の語例に「子めかし・人めかし・物めかし・女めかし」を追加する。この節の後に、節を新設する。

10.1.6.7 「もの-」型形容詞・形容動詞(新設)

接頭辞「もの-」は、感情・心情を表す形容詞や形容動詞に付いて、「なんとなく…」の意を付加するといわれる(「すべてもの云々と物といふことをそへていふ詞は、物事につけて云々といふ意にて、ただ何となくおのづから然る意也。ここも其意にて、何といふこともなくただ物事につけて心ぼそき也。」萩原広道『源氏物語評釈』)。

- (1) 日暮るれば下葉木暗き木のものもの恐ろしき夏の夕暮れ(好忠集)
- (2) 松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してものあはれなるを
(源・末摘花)
- (3) いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを(源・桐壺)

◆ただし、①のように「もの^の-」となる場合もあり、②のような例もあることから、「もの-」を「何となく…」の意の接頭辞とすることに異論もあり、山王丸有紀(2011)は「もの-」を一種の抽象名詞ととり、(2)を「辺りの様子が風情があるので」、(3)を「この状況が心細い様子で」のように解することを提案している。

① [光源氏ハ] ものつつましきほど(=年齢)にて、[左大臣ニ] ともかくもあへしらひ聞こえ給はず。(源・桐壺)

②月ごろ、何となく(=ナントナク) もの騒がしきほどに(=私ヲ取り巻ク環境ガ落ち着カナイノデ)、御琴の音をだにうけたまはらで久しうなり侍りにけり。(源・紅梅)

◆「少し…」 「何となく…」の意を添える接頭辞には、「なま-」もある。

・[源氏ガ] かくわざとがましうのたまひわたれば[命婦ハ] なまわづらはしう(源・末摘花)

「大学の衆どもの生不合にいましかりしを」(大鏡)は漢語語幹に付いた例(「あまり暮らしが豊かではない」の意)。

◆「もの+動詞」型の語もある：ものさぶ・もの^{ふる}旧る。

277頁「10.1.8.3 「-けし」型形容詞」。277～278頁用例(1)のように、「-かなり」と対応する「-けし」型形容詞を「一次的ケシ型」、「寒けし⇔*寒かなり」のように、「-かなり」と対応をもたない「-けし」型形容詞(「しほどけし・つゆけし・ながけし・ねぢけし・むくつけし・をしけし」など)を「二次的ケシ型」と呼ぶ(蜂矢真郷 2001)。277頁下から3行目で言及した、已然形「-けれ」・補助活用形が不活発であるというのは、「一次的ケシ型」の方である(蜂矢真郷 2001)。なお、二次的ケシ型は、「-かなり」の形が存しないが、「露けげなり」のように「-げなり」型の形容動詞型をもつ。この節

の後に、節を新設する。

10.1.8.3' その他の特殊活用(新設)

上代では「無し」の已然形に「無かれ」の形がみえる。

- (1) 天地の神はなかれ〔无可礼〕や 愛しき我が妻離る(万 4236)
「怪し」の連体形は、中世には「怪しき」に代わり「怪しかる」が多く用いられた。

「10.1.8.4 奈良時代の形容詞の活用」の 279 頁 1 つめの◆で、中古和文での例を追加する。

- ・わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ(伊勢 87)

この節の後に、節を新設する。

10.1.8.5 -しし(新設)

鎌倉時代以降、シク活用の終止形を「-しし」の形にすることがある。これは、「高く→高し：美しく→X。X=美しし」のような類推による、誤った語形である。

- (1) 神慮まめやかに、貴くたのもしし。(雑談集 10)
(2) 在家に火をぞかけたりける。十二月廿八日の夜なりければ、風は激しし、火元は一つなりけれども、吹きまよふ風に、多くの伽藍に吹きかけたり。(平家 5・奈良炎上)

◆本文存疑ながら、歌の例をあげておく。

- ・秋ふかみ夜風はげししむべしこそよもの里人衣うつなれ(歌合 125 東塔合・群書類従本)

◆近代文語文では広くみられ、文部省の「文法上許容スベキ事項」(1905)の 2 に「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ従フモ妨ナシ」とある。

[出典追加] 承久記④元和四年古活字本=古典文庫(現代思潮社)『総覧』で使用している「古活字本」(新大系 43)は「慶長古活字本」である]／雑談集①無住道暁(1226-1312)
②1305年③中世の文学

[引用文献追加] 山王丸有紀(2011)「「ものー」小考」『国語語彙史の研究』30／蜂矢真郷(2001)「一次的ケシ型と二次的ケシ型」『国語語彙史の研究』20